

# 『個の学びを「促し」「ふり返り」、さらに「深める」ための ICT 活用』

～リーディングをスピーキングにつなぐ ICT 活用の可能性を探る～

尾花沢市立尾花沢中学校 水田 怜 樹

## <研究の概要>

本研究では『『わかる・できる』授業の創造 ～協同的な学びを通して～』という本校の研究主題に則り、特に英語の「リーディング」活動における ICT 活用の可能性や有効性について考察した。英語の授業における ICT 活用の効果は多くの生徒によって実感されており、教師にとっても同様である。本研究ではタブレットのボイスレコーダー機能や動画撮影によるモニターの促進、写真や動画を提示することによる背景的知識の活性化や課題の共有について生徒がどう自らの学びを深めることができたかを検証した。その結果、①単元やその時間のトピック・テーマに沿った画像や動画を示すことは、生徒の背景的知識の活性化に効果的であること、②「読む」学びを深めるには映像よりも「音声」でモニターすることが効果的であること、③「映像」で残し、対話を通してモニターすることが「読む」学びを「話す」力へ深めるために効果的であること、が示唆された。リーディングにおける学びを深めるために、導入場面からその後の活用場面まで ICT 活用の有効性が実証された。その反面、その学びを汎用的な英語力につなげる（その他の技能へつなぐ）ための ICT 活用および基礎基本の徹底を促す学習について考えていく必要性が課題として挙げられた。

## 1 研究テーマ

本校では『『わかる・できる』授業の創造～協同的な学びを通して～』をテーマに授業改善に取り組んでいる。それを達成するため、①ジャンプ（思考・判断・表現）を促す学習課題の設定、②学びを促進する手立ての設定、③学びのふり返りを促す、の3つのアプローチを意識して授業を展開している。

昨年度から今の学年（3年生）を担当し、2年間英語の授業を展開してきた。「パワーポイントを用いて写真や画像、キーフレーズを取り入れた Oral Introduction」や「Writing の途中経過をタブレットで撮影することによる Sharing」、「タブレットを使ってスキットやスピーチを録画することによる Monitoring」など様々な場面で ICT を活用する場面を設けてきた。昨年度末の生徒によるふり返り用紙を分析すると、ICT 活用の効果として、①TV に必要事項が出され視覚的にも見やすいので、課題がつかみやすい、②タブレットで映像を見返すことで改善点を意識して何度もチャレンジできる、というメリットがあった反面、③「自分なりに工夫したスピーチにしよう」というワンパターンな英文・発表にしかならなかった、④タブレットで撮影するのはいいが、英語力向上につながっているイメージがもてなかった、という意見もあった。生徒の英語に対する学

習意欲向上に ICT 活用は効果的であることは様々な研究からも言われているところである。それを自らの英語力につなげるとともに、個々が抱えている課題を解決し、より学びを深められるような ICT 活用が求められると考え、今年度のテーマを『個の学びを「促し」「ふり返り」、さらに「深める」ための ICT 活用』と設定した。

前年度行ってきた Oral Introduction や Sharing を継続しながら一人ひとりの学びを「促し」、個々の活動を自分で「ふり返り」ことができる工夫を考える。「深める」という言葉をイメージしたときに、英語の4技能の中で「読む」という技能であれば、個々で深まりを実感できるのではないかと考え、今年度は「リーディングにおける ICT 活用」そしてそれを「英語における表現力向上につなげるためには」ということに焦点を当てて実践した。

## 2 視点

- (1) 『個の学びを「促し」「ふり返らせる」ための工夫』
- (2) 『個の学びを「深める」ための工夫』

## 3 研究の方法と計画

使用した教科書は「NEW CROWN（三省堂）」

で、担当学年は3年生である。

#### (0) A児およびB児について

前向きに英語学習を進めるA児は、グループやペアにおける学習にも意欲的に取り組むが、聞き手を意識した表現活動などでは消極的になっていた。ICTを活用し生徒によるモニター活動を促すことによって持ち前の理解力を表現力の習得へ少しでもつなげたい。

B児は理解の段階で深まりが弱く、形式的な音読にとどまっている。「表現したい!」という意欲を英語力向上につなげられるようなICT活用を研究することは「深まり」のある授業を展開することへのヒント獲得につながると信じる。

#### (1) 視点1について

① パワーポイントを活用し、授業ごとに**Oral Introduction**を展開していく。その際、単元での授業の流れ・**Oral Introduction**の流れが単元のテーマからずれないように1つのファイルで連続したスライドを作成していく。

② 音読練習の中で「タイトルクレジット」のアニメーション機能を活用する。その際、英語特有の発音の仕方（イントネーションや強勢、リンキングなど）について色分けしたり下線を引いたりすることで、視覚的に意識できるように工夫する。

③ 課題とふり返り項目がリンクするよう、授業の構成を工夫する。課題の達成に迫るために画像やグラフ、動画などを適宜組み込み、教科書本文がより生徒にとって身近に感じられるようにする。

#### (2) 視点2について

① 尾花沢中学校には**Yoga Tablet**が16台完備されていて、4人×8グループや2人×16ペアを基本としてそれぞれにタブレットを配布することができる。映像だけでなく「音声」のみを録音することで一人ひとりの音読をタブレットに保存し、分析し練習に生かすことで深い読みができるよう促す。

## 4 研究の実践

### (1) 実践1

#### ①実践の概要

#### ア 単元名

##### Let's Read 1 "Dolphin Tale"

#### 本時の目標

登場人物の心情にふさわしい音読を工夫することができる。

#### イ ICTの活用について

タブレットを用いて一人ひとりの音読を録音した。自分の音読を自分で聞いたり、練習の成果を仲間に聞いてもらってフィードバックをもらったりしながら活動意欲を高めつつ、表現読みの向上を図った。

#### ②子供の学びの姿

○ ウォームアップとして、パワーポイントの「タイトルクレジット」のアニメーションを用いた速音読で子供の活動意欲を促した。テレビの活用は視線を一点に集中させることができた。

○ 自分で考えた工夫点を意識して音読練習するとともに、表現読みをタブレットに録音しモニター活動を促した。ペアに1台のタブレットを用意することができ、一人ひとり、表現読みの質の高まりが実感できていた。

○ 全体に発表することが苦手なA児も、聞き手が一人であるということから安心感が得られ、質の高い表現読みを工夫することができたと感じていた。また、B児にとっても自分で考えた表現読みの工夫を適宜改善しながら、何度も繰り返し録音することで納得いく表現読みができていたようだった。

#### (2) 実践2

#### ①実践の概要

#### ア 単元名

##### Lesson 6 "I Have a Dream"

#### 本時の目標

キング牧師がスピーチに込めた思いが聞き手に効果的に伝わる表現読みを工夫することができる。

#### イ ICTの活用について

「実践1」をさらにレベルアップできるようタブレットのボイスレコーダー機能を活用し、一人ひとりの音読を録音した。音読をモニターし、キング牧師の思いが伝

わっている表現読みになっているかどうか子供に検証させながら表現読みの向上を図った。事前にキング牧師のスピーチを動画で紹介し、より具体的なイメージをもたせた状態で練習に取り組ませた。

## ②子供の学びの姿

- 前時までの読解の段階で、キング牧師の心情が表れている英文に注目したり、どのように読めばそれが表現されるかを考えたりする課題を設定してきた。そのため、キング牧師のスピーチをみたときに、自分が考えた工夫点と実際のスピーチとを比較することができ、それに近づけようと積極的に練習に取り組む姿が見られた。
- ボイスレコーダー機能の活用が2回目ということもあり、子供自身が抵抗なくタブレットを上手く活用していた。自然とマイクをペアのほうに向けたり、お互いにお互いの音読を聞きあったり、さらにアドバイスをしたりディスカッションしたりする場面も増えたように感じた。
- ペアだけでなく、同じ生活班や4人グループで聞き合いする場面もみられ、質の高い表現読みに仕上げた子供も多かった。ほかのペア・グループの仲間も協力してよりよい表現読みを創り上げようという雰囲気もみられ、学ぶ意欲・学びの深まりがみられた。



## (3) 実践3

### ①実践の概要

#### ア 単元名

Lesson 7 “English For Me”

本時の目標

聞き手のことを意識して、自分の伝えたいことを効果的に伝えるスピーチを英語ですることができる。

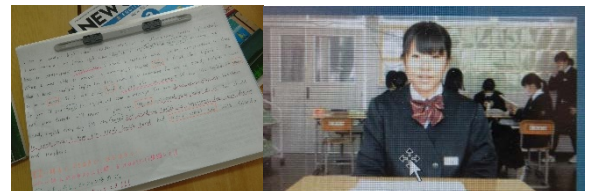
#### イ ICTの活用について

「実践2」の質をより高めるために、原稿を読む段階では継続してタブレットの

ボイスレコーダー機能を活用した。自分の伝えたいことを聞き手に伝えるにはどのような工夫が必要か（イントネーションや強弱など「実践1」や「実践2」で高めてきたことに加えて、ジェスチャーやアイコンタクトなどの工夫）を考えたいうえで、タブレットのビデオ機能を活用し英語での表現力の向上を図った。

## ②子供の学びの姿

- 1回目に録画したものよりも2回目、3回目に録画したもののほうが、質の高まりがみられた。その要因として2つのことが挙げられる。  
①タブレットに保存されている他の人の動画を参考にすることで、自分のスピーチに足りない要素や真似できる要素に気づくことができていた。例えば、「暗記しよう」という一生懸命さがとても伝わるスピーチをしていた子供が、同じグループの子供の動画をみて「原稿を見てでも、相手のことをしっかり意識しなきゃいけない」ということに気づき、ジェスチャーや目線について改善が見られた。  
②自作の英文であることから、英語特有の音声の特徴や、本当に自分が伝えたい内容についてより深く分析することができた。動画でモニターすることにより、音声だけでなく、表情や動きにも着目することができる。表現力を身につけるために必要な要素について自分で考えることができたところにタブレット活用の意義を感じることができた。



## 5 結果と考察 (○：成果 ☆：考察)

### (1) 視点1について

- テレビを活用し、学習課題を視覚的にわかりやすく提示することで、授業のテンポが良くなった。全員を注目させることができ、「何をす

るのか」が明確になる。そのことが「学習意欲」の向上につながるということがわかった。

- 画像や動画を提示することは、子供の背景知識を活性化させ、よりスムーズに活動に移ることができた。内容理解の活動を行うならば、本文に関する知識がある場合とない場合では読み取る内容に大きな差が出る。ある程度の知識があるものならば、多少難しい内容でも読み取れる可能性は高くなる。教科横断的な情報も **Oral Introduction** で取り入れながら学習意欲を高めていく必要がある。それも **ICT** があれば短時間でわかりやすく行うことができる。

- 背景知識が入った状態で読解に取り組み、読んだことに対しての感想や意見について「ふり返らせる」場面も与えやすくなると感じた。授業を組み立てる段階でふり返る項目も与えることで、今日の授業で考えさせたいこと、子供にとっては「考えなければいけないこと」が明確になる。

- 録音した音声や、録画した動画を何度も確認することで、最終ゴールに向かうまでの練習の過程や、取り組みについてふり返ることもできた。課題に対するふり返りに加えて、メタ認知的なふり返りも促すことが次への学習意欲へつながるのではないだろうか。

- ☆ **ICT** を効果的に活用し、学ぶ意欲をより高めるためには単元や本時の課題をよりクリアに、子供にとって必要感のあるものにする必要がある。課題が明確であれば、教師がねらう力を身につけさせることができるし、いきいきと活動する姿が見られる。課題とリンクしたふり返りの項目を吟味することで、より単元構成や授業に一貫性を持たせることができる。

- ☆ 課題をクリアしたかどうかの達成度は子供によって異なる。それが教員の感覚と異なる場合も多いに予想される。モデルの質を吟味し、教員が設定する目標にどれだけ近づけられたか、基準を明確にすることでより効果的に子供に英語力を身につけさせることができる。

## (2) 視点2について

- 「読む」学びを深めるためには「音声を残す」という活動も非常に効果的である。ボイスレコ

ーダーの活用は、自らの学習を自分でモニターし、改善しながら深めることができる。

- さらに表現力を深めるためのツールとして「映像を残す」ことも効果がある。より聞き手を意識したスピーチ・発表をするにはしっかりと発音やイントネーションで英語を話すことが必要である。ボイスレコーダーで練習したことを「話す」学びに深めることができる。

- メモや思考の流れを **TV** で共有することは、思考がなかなか進まない生徒にとって思考の手助けになるものである。思考の経過をすぐ提示できる工夫・設備の準備が重要である。

- ☆ **ICT** 活用によって深まった学びを、オーセンティックな場面で転移されるかは本研究で実証することはできなかった。深まった学びを自らの汎用的な英語力に転移させるためのジャンプ課題を吟味し、より実生活で使えるような授業を展開していくことが必要である。

## (3) 研究を終えての提言

- ・ **ICT** の活用は子供の学ぶ意欲を引き出し、学習に熱中させるためにとっても効果的である。**ICT** 活用に抵抗があっても、何か一つチャレンジしそれを続けていくことで自信も少しずつついてくると考えられる。

- ・ 探求型学習の推進が求められている今、授業において子供の探求心をくすぐる課題を設定することが必要となる。課題や目標を吟味し、それを達成するために **ICT** をどう活用するかを考えることが大事である。「**ICT** ありき」の授業は、教科の本質を損ねている可能性がある。

- ・ 教科の本質を高めるためには「コンテンツ・ベース」の授業から、「汎用的英語力」を高められるような「コンピテンシー・ベース」の授業づくりに取り組む必要がある。

